

科目名	刑事政策	科目分類	■専門科目群 □総合科目群	
			法律学科	□必修 ■選択
			学科	□必修 □選択
英文表記	Criminal Policy	開講年次	□1年 □2年 ■3年 □4年	
		開講期間	□前期 □後期 ■通年 □集中	
ふりがな	えびさわ すすむ	実務家教員担当科目	修得単位	4単位
担当者名	海老澤 侑	実施方法	■対面のみ □遠隔のみ □対面・遠隔併用	
授業のテーマ	犯罪とは何か、犯罪は何故起きるのか、刑罰とは何か、適切な犯罪者処遇とは何か。これらについての知識を習得する。			
到達目標	受講者は、本講義を履修することで、日本における犯罪情勢を理解し、その原因と対策について説明することができるようになる。			
授業概要	本講義は、犯罪白書なども用いて現代日本における犯罪情勢を理解するとともに、犯罪原因・犯罪対策一般について学習する。その後、犯罪被害者の保護や、少年非行などの具体的な各種犯罪の原因とその対策についても学習する。 毎回、講義の終わり 10～15 分を使って、学んだ内容、コメントを書いてもらう。 受講者の希望により外部の専門家に講演をお願いすることもある。			
授業計画				
第1回	導入① 犯罪学とは何か、統計データの紹介	第17回	社会内処遇	
第2回	犯罪学の歴史	第18回	財産犯	
第3回	生物学的条件と犯罪① 概説、年齢と犯罪	第19回	刑の量定① 手続き、基準	
第4回	生物学的条件と犯罪② 性別と犯罪	第20回	刑の量定② 具体的内容（殺人、性暴力）	
第5回	精神障害と犯罪① 精神病質	第21回	保安処分・不定期刑	
第6回	精神障害と犯罪② 精神病質犯罪者の実態と手続き	第22回	少年法① 少年法の運用実態	
第7回	犯罪心理学	第23回	少年法② 少年法改正	
第8回	犯罪社会学	第24回	犯罪被害者への支援	
第9回	社会的条件と犯罪	第25回	性犯罪① 性暴力犯罪に対する現状	
第10回	導入② 刑事政策とは何か、統計データの紹介	第26回	性犯罪② 性暴力犯罪に対する今後の対応	
第11回	死刑① 死刑の歴史	第27回	性犯罪③ 性風俗犯罪に対する対応	
第12回	死刑② 死刑存廃論	第28回	ファミリーバイオレンス① DV	
第13回	死刑③ 死刑の適用基準	第29回	ファミリーバイオレンス② 児童・高齢者虐待	
第14回	自由刑① 歴史、現行のシステム	第30回	組織犯罪	
第15回	自由刑② 刑事収容施設法、今後のシステム	第31回	交通犯罪	
第16回	中間試験	第32回	期末試験	
授業時間外の学習	各回の授業で扱う内容について教科書の該当箇所をあらかじめ読むこと（予習：90分） 授業時に紹介した資料について図書館、インターネット等を使って確認すること（復習：90分）			
履修条件 受講のルール	教科書を読み進めつつ、適宜資料を提示するスタイルをとるため、毎回必ず教科書を持参すること 法律事例研究Ⅰ・Ⅱ、刑法総論、刑法各論、刑事訴訟法の単位を修得済みであることが望ましい 履修者に求める授業態度については、初回の講義時に説明する			
テキスト	岩井宜子『刑事政策【第7版】』（平成30年、尚学社）			
参考文献・資料	法務省法務総合研究所編『令和5年版犯罪白書』（令和6年、日経印刷） 紙媒体で販売されているが、法務省HPにPDF版が無料で公開されている。 国家公安委員会＝警察庁編『令和5年版警察白書』（令和5年、日経印刷） こちらも紙媒体で販売されているが、警察庁HPにPDF版が無料で公開されている。			

	<p>瀬川晃『犯罪学』（平成10年、成文堂） 守山正＝安部哲夫編『ビギナーズ刑事政策【第3版補訂版】』（令和5年、成文堂） 川出敏裕・金光旭『刑事政策【第3版】』（令和5年、成文堂） 竹内謙治ほか『刑事政策学』（令和元年、日本評論社） その他、授業時に紹介する。</p>
成績評価の方法	<p>期末試験50%、中間試験25%、各回のコメントペーパー25% その他、講義時の質疑応答の内容により平常点を加えることもある。 ※出席回数が規定に満たなかった場合及び授業料その他納入金等の全額を納めていない場合は試験を受けることができません。</p>
オフィスアワー	<p>月曜、金曜の15:00～16:30を設定しているが、研究室（海老澤研究室）に在室中は、いつでも来訪を歓迎する。 時には、講義で学んだこと以外についての疑問・意見提示、あるいは雑談をしたい際も、来室してかまわない。</p>
成績評価の基準	<p>秀(100～90点)、優(89～80点)、良(79～70点)、可(69～60点)、不可(59点以下)</p>
実務経験及び実務を活かした授業内容	
学生へのメッセージ	<p>内容によっては、これまで常識と思っていたものが誤りだったと気付くこともあるかもしれない。これを実感するために、常に新聞などで情報収集に努め、講義で学んだことと比較してほしい。</p>